

初期スキルが便利すぎて 異世界生活が 楽しすぎる!

Shoki Skill Ga Benri
Sugite Isekai Seikatsu Ga
Tanoshisugiru!

霜月電花

Hyouka Shimotsuki

Illustration
バルブヒロシ



ララディーナ

冒険者ギルドの
副ギルドマスター。
怒るとものすごく
怖い……？

ワーウィア

冒険者ギルドの
ギルドマスター。
物を片付けられない
残念美人。

ラルク

ラルクが住む国の王様。
とにかく面白いことに
目がない。

グルド

顔が怖すぎる
冒険者ギルドの受付係の男性。
かつては最強クラスの
冒険者だった。

ウォリス

物静かな王子様。
本が大好きで、いつも
お城の図書室にいる。

ローゼリア

天真爛漫な王女様。
算術がちよっぴり
苦手……

ラルク

本作の主人公。三つの便利な
初期スキルを駆使して、
異世界での第二の人生を
思う存分楽しむ。

登場人物紹介
MAIN CHARACTERS

1 転生

「……ここはどこだ？」

俺、四宮^{しのみや}樂は体を起こし、辺りを見渡した。

俺の目の前には、今まで見たことがないような真っ白い空間が広がっている。

寝かされていたベッドから下り、自分がなぜこんな場所にいるのか思い出そうとしてみる。

「そういえば、トラックに撥^はねられたんだっけ？」

そう、学校が終わり、俺が友人と談笑しながら帰っていると、道路を走っていたトラックがいきなり突っ込んできたのだ。

前にいた友人はトラックに掠^{さら}りもしなかったのに、真後ろにいた俺だけが撥ね飛ばされ、理不尽だと思っただよな。

「それでそのまま意識がなくなって、気が付いたらここにいたってわけか……とりあえず、動き回るの危険そうだ……」

そう呟いてベッドに腰を下ろすと、いきなり目の前に黄色い光の玉が集まりだした。

光はどんどん大きくなっていき、一際^{ひととせ}強い輝きを放つと、光が収まって扉が出現した。俺が不思議

議な光景に呆然としていると、扉が開いて一人の男性が現れる。

見た目は20代後半で、背丈は180センチある俺より低い。中肉中背といった感じた。一見どこにでもいそうな普通の青年のようだが、驚くべきことに、その背中には大きな翼が生えていた。

男性がにっこりと微笑み、口を開く。

「起きていらっしやいましたか」

「さ、先に質問してもいいですか？」

俺が咄嗟に尋ねると、男性は笑みを浮かべたままうなずく。

「はい、なんででしょうか？」

「ここはもしかして……死後の世界ですか？」

「ええ、その認識で間違っています」

慌てる俺とは対照的に、男性は淡々としていた。

マジか……本当にあの世つてあるんだな。

感心していたら、男性が続けて言う。

「こんなところでは話もできませんので、移動しましょう」

男性はさつき出てきた扉を開けて中に入っていく。少し迷ったが、俺は付いていくことにした。

扉の先は、日本の茶室のような場所だった。畳が敷かれ、座布団が二つとちゃぶ台が一つ置かれている。

「あつ、どうぞ座ってください。少し長い話になりますので」

男性は座布団に座り、俺に向かいの座布団を勧めてきた。俺が座ると、男性は話し始める。

「まずは自己紹介をしましょうか。私は神界の長、サマディエラと申します。サマディと気軽に呼びください」

「……えっと、サマディさん。神界の長つていうことは……あなたはまさか、神様だったり？」

「はい、その認識で合っていますよ。四宮様」

俺はポカーンとしてサマディさんを見つめた。

サマディさんは気の毒そうな顔をする。

「驚くのも無理ありません。さて、なぜ私が四宮様をこのような場所にお呼びしたか、事情をお話しします」

「あつ、はい。お願いします」

頭を下げると、サマディさんは順を追って説明をしてくれた。

なんでもサマディさんが普段住んでいるのは神界という場所で、そこには様々な神が存在しているらしい。サマディさんは神界の代表、つまり神々のリーダー的存在なのだそうだ。

そのサマディさんによると、俺が死んだのは、とある神による悪戯のせいだという。

神々は本来、人を導く存在だ。それにもかかわらず、地球を見守っていた神々の一柱が突然役目を放棄して、俺に目を付けて運命をおもちゃのように操って遊んでいたとのこと。

「四宮様にも思い当たる節はあると思います。これまでの人生で、やたらと不幸に見舞われてきませんでしたか？」

確かに今まで不運なことはたくさんあった。触れてもいない柵が倒れてきて潰されそうになったり、キャンプ場で吊り橋を渡っていたら板が抜けて落下しそうになったり、両親が同時に浮気をして家を出ていたり……思い返せば、理不尽なことだらけだ。

サマデイさんは悲しそうに口を開く。

「神界では個人の運命を弄もてあそんではいけないという掟おきてがあるのですが、その者はうまく私どもの監視を逃れ、四宮様で遊び続けていたのです」

「なるほど、それで俺は運が悪かったんですね」

「はい、本当に申し訳ありません。今回のようなことがないように、神々の代表として、私がより一層神達の監視を強めます。この度は謝罪のために、天国に向かっていた四宮様の魂を呼び戻したのです。しかしいくら私が神界の長であっても、残念ながら四宮様を生き返らせて元の生活に戻すことはできないのですが……」

「そうですか……それじゃあ、もう俺は天国に行くんですか……?」

仕方ないこととはいえ、かなり不安だ。

しかし、サマデイさんは俺の不安を払うようにニコツと笑った。

「いえ、四宮様もつと喜ぶところに行けますよ」

「どういうことですか？」

「四宮様、異世界に行ってみませんか？」

「へっ?」

突然の提案に、素すつ頓狂とんきやうな声を出してしまう。

混乱していると、サマデイさんはさらに詳しく説明してくれた。

「この度、私どものせいで四宮様を死なせてしまったことに対して何かお詫びをしようと思いましたが、勝手ながら四宮様について色々調べさせてもらいました。四宮様、ゲームやアニメのようなファンタジーの世界に憧れていますよね?」

「ええ、そうですけど……」

確かに俺は、昔からゲームとかアニメみたいな世界に行ってみたいと思っていた。両親は小さい頃から勉強しろとうるさかったが、記憶力が秀ひびでていたおかげで、勉強の時間は少しかつた。その分、余った時間をゲームやアニメ鑑賞に回していたので、ファンタジー世界に憧れを抱くようになったのだ。

「そこで異世界に転生して新たな生活を送っていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか?」

「は、はい！ 行きます!」

考える間もなく即答した。憧れていた異世界に行けるって言われたら、二つ返事で了承するのは仕方ないと思う。それに、天国で暮らすより異世界に転生したほうが断然楽しそうだし。

俺の返事に、サマデイさんがにこやかにうなずいた。

「四宮様なら了承してくださると思えました。それでは、さっそく準備に取りかかりましょう」

サマデイさんはそう言うと、指をパチンツと鳴らした。すると突然、目の前にゲーム画面のようなボードが現れる。そこには俺の名前の他に、色々な項目が書かれていた。

| | |
|-------|-----|
| 【名前】 | 四宮楽 |
| 【年齢】 | ―― |
| 【種族】 | ―― |
| 【性別】 | ―― |
| 【状態】 | ―― |
| 【レベル】 | ―― |
| 【S P】 | ―― |
| 【力】 | ―― |
| 【魔力】 | ―― |
| 【敏捷】 | ―― |
| 【器用】 | ―― |
| 【運】 | ―― |

【スキル】 『調理…3』

【特殊能力】 『記憶能力向上』

【加護】

【称号】

「もしかしてこれは……俺の能力ですか？」

「はい、そうです。話したり動いたりしているので実感はあまりないと思いますが、現在の四宮様は魂だけの存在になっています。そのため、ほとんどの項目が消えているんです。ですが、地球での生活で培った技能は、スキルや特殊能力として残っています。これらは転生先の世界に持ち込めますよ」

サマデイさんの説明はなんとなく分からないが、ともかくステータス欄をよく見てみることにした。そこには二つの能力が書かれていた。

まず一つ目、【スキル】の項目にある『調理』について。サマデイさんによると、これは俺がこれまで自炊することが多かったから発現したスキルらしい。このスキルを持っていれば、初めて料理する食材でも適切な調理法を見極める能力が高くなるとのことだった。

そして【特殊能力】という項目にある『記憶能力向上』は、その名の通り、持っているだけで記憶能力が上がるというものらしい。確かに俺は人より物覚えが早かったし、教科書を一回読んだだ

けで頭に入るので、テストでも毎回良い点を取っていた。ちなみに、【特殊能力】は訓練などで習得できる【スキル】と違い、生まれ付き持っているか神からもらうしか取得方法がないらしい。

「一息入れましょうか。お茶でも飲みましょう」

サマデイさんが言い、何も無い空間からお茶の入った湯呑みを出現させる。渡してくれたお茶に口を付けると、温かくてほっとした。

少し落ち着いたので、サマデイさんに改めて確認してみることにする。

「俺の能力って転生しても引き継がれるんですよね？」

「はい、今の記憶や能力を引き継いだまま向こうの世界に転生させます。また、我々もできるだけ四宮様をサポートさせてもらいます」

「今の記憶もですか……でも、地球の知識を異世界に持ち込んで大丈夫ですか？」

俺の質問にサマデイさんは深くうなずいた。

「大丈夫です。地球からの転生者は今まで何人かいましたし、四宮様のように前世の記憶を完全に持った人間が転生するといったケースもごく稀まれにありました。それと、四宮様には私どもからプレゼントがあります」

「プレゼント？」

そう聞き返すと、サマデイさんはニカッと笑って話し始めた。

「四宮様への謝罪の意味も込めて、四宮様に対して何かしてあげられないかと神々一同で考えた結

果、四宮様が考えた三つのスキルを転生する際に与えることになったのです」

「なるほど……でも、いいんですか？ そんなことをしてもらって……」

なんだか申し訳なくなり、思わず小声になったが、サマデイさんは笑顔のままうなずく。

「もちろんですよ。繰り返しになりますが、今回は私の管理不足が招いたことなので……遠慮なくスキルを作ってください」

「……急にそう言われてもな。少し考えてもいいですか？」

「はい、決まるまでお待ちしますよ。参考程度に向こうの世界に存在するスキルを一覧にして、ボードに出しますね。自分で一から作るのが難しいようであれば、この中から選んでもらっても構いません」

そう言うと、サマデイさんは先ほどのステータスと同じようなゲーム画面っぽいボードを出現させる。ボードにはズラッとと画面いっぱいスキル名と能力の情報が載っていて、下にスクロールしていつでも全然終わりが見えない。

俺は、永遠に続くんじゃないかと思われるほど数多くあるスキルを見ながら、新しい初期スキルを作成していった。

まず作ったのは、『鑑定眼』かんていがん。物体や人間、スキルなどを鑑定し情報を得ることができるといって、異世界に転生する小説では定番のスキルだ。これは元々、転生先の世界にもあった『鑑定』というスキルをベースに作ったのだが、ちょっと改造して、見える項目を増やしたり、相手が鑑定を阻害

する効果を持つスキルを持っていても打ち消したりできるようにしている。また、転生先の世界でステータスを見るためには鑑定系スキルが必須らしいから、このスキルはとも役立つはずだ。

二つ目は『便利ボックス』というスキルだ。よくあるアイテムボックスや収納系スキルと似ているけれど、それらのスキルには容量に制限があるので、一定量以上の道具は収納できない。

そこで俺は、自分の魔力量に応じて、入れられるアイテムの個数ではなく種類が増えていくという仕組みにした。収納できる種類の限界は自分の魔力値の半分まで。たとえば、魔力が100あれば50種類のアイテムを個数の上限なしに収納できるという具合だ。

最後のスキルは何にしようかな、と考えていたら、サマデイさんが声をかけてきた。

「お伝えし忘れていましたが、スキルにはレベルが存在しますので、スキルが成長することを念頭に置いて作るいいかもしれませんね」

「そうなんですか？ でも、成長っていつてもイメージが湧かないな……」

「たとえば鑑定系のスキルでしたら、レベルが上がれば得られる情報の量が増えます。他にも、攻撃魔法なら威力が高まったり、収納系スキルなら収納できる容量が増えたりするという感じです」

サマデイさんの言葉を聞いて、少し考える。

「……ということは、『便利ボックス』もレベルが上がると性能が良くなるんですね。でも、このスキルには容量制限とかはないし、どうやって成長させよう……」

「では、レベルが上がるごとに様々な機能を追加していくようにするのはいかがでしょうか？」

「あ、いいですねそれ。けど、追加させる機能がすぐには思いつかないから、もうちょっと考えてもいいですか？」

とは言ったものの、全然イメージが固まらない。

しばらく悩んでいると、サマデイさんが助け舟を出してくれる。

「でしたら、レベルが上がったタイミングで欲しい機能を自由に足していく、という風にしましょうか」

「え、効果の後付けなんてできるんですか？」

「まあ、今回は特例ですから大丈夫です。向こうで生活するうちに欲しいと思う機能が分かってくると思いますから、その都度スキルを成長させて役立ててください」

「ありがとうございます！」

お礼を言い、最後のスキルはどんなものにしようか考える。

うーん……効果をあとから追加してもいいなら、かなりチートなスキルを作れそうだけ……

しばらく悩んでしまったが、ようやく納得のいくものが作れた。結果的に、最後のスキルはどんなものにもなかった。

名前は『生活魔法』。これは、自分が生活に必要なと思ったスキルを取得できるというスキルだ。

一見地味な名前と説明文だけど、効果はチートそのもの。たとえば、俺が『自分が覚えられる全ての属性魔法を覚えたい』と思えば、全部の魔法を取得できるのだ。

サマデイさんに頼んだらかなり渋っていたが、なんとか通った。これさえあれば、必要なときに新たなスキルを取得できる。

ただし、何回でも覚えられるようにすると、世界のバランスを崩壊させかねないということで、サマデイさんから回数制限をかけられてしまった。覚えられるチャンスは『便利ボックス』と同様に一つのレベルにつき一回。転生先の世界ではスキルレベルの上限は5ということだから、『生活魔法』を使えるのは最大五回ということになる。それでもチートスキルには違いない。大事に使わないとな。

『鑑定眼』『便利ボックス』『生活魔法』の三つのスキルを作り終えたところで、サマデイさんが俺に両手をかざす。

「それでは、転生前の準備は終わりましたので、これでお別れです」

「そうですか……えっと、向こうに行ったあとはサマデイさんとは会えないんですか？ 二度と会えないのは、なんか寂しいので……」

「そう仰おっしゃっていただけで、嬉しい限りです。それなら、毎日少しの時間で結構ですから、お祈りをしてください。祈り続けることで『信仰心』のスキルレベルが上昇すれば、神界で私と会えるようになるでしょう。またお会いできるそのときを楽しみにしています。次に目覚めたときは、あなたは赤ん坊になっていますよ。それでは、良き第二の人生を」

サマデイさんが笑顔で言った。返事をしようとしたが、サマデイさんの両手から白い光が放出され、俺の意識は途絶えたのだった。

2 ギルド

「……ここは」

目を開けて周りを見ると、なぜか左右にレンガの壁があった。どうやら俺は、建物と建物の隙間で横になっているようだ。

「というか俺は、なんで外で寝てるんだろう？ 一応下に莫も塵ぢが敷いてあるが、地面がゴツゴツしているものすごく痛い。」

頭が完全に起きていなかったが、無理やり身を起こす。

「……えっと、確か……俺は転生したんだっけ」

自分の手や体を見してみる。どういうわけか、少年のような大きさになっていた。

「ついさつき転生したばかりなのに、なんでもうこんな大きくなってるんだ？ サマデイさんは赤ちゃんに転生させるって言ったのに……そうだ。ステータスを確認してみよう」

頭の中で自分自身に向かって『鑑定』と念じてみる。

すると、天界で見たのと同じようなホログラフィックのステータス画面が、目の前に出現した。



| | |
|--------|--|
| 【名前】 | ” |
| 【年齢】 | 10 |
| 【種族】 | ヒューマン |
| 【性別】 | 男 |
| 【状態】 | 飢餓・疲労 |
| 【レベル】 | 1 |
| 【S P】 | 0 |
| 【力】 | 100 |
| 【魔力】 | 100 |
| 【敏捷】 | 100 |
| 【器用】 | 100 |
| 【運】 | 51 |
| 【スキル】 | 『調理』：3 『便利ボックス』：1 『生活魔法』：1 『鑑定眼』：1 『短剣術』：1 『毒耐性』：1 『精神耐性』：3 『飢餓耐性』：1 『記憶能力向上』 『世界言語』 『経験値補正』：10倍 『神のペール』 |
| 【特殊能力】 | |
| 【加護】 | 『サマディエラの加護』 |

「……え？」

色々大変なところがあつて驚いてしまった。名前がないのは転生したばかりだからいいとして、なんか、強そうな能力がいっぱい増えているんだけど。

「……いや、驚いている場合じゃない。『鑑定眼』で一つずつ調べてみよう」

頭を切り替え、増えている特殊能力に向けて『鑑定』と念じてみる。こちらもステータスと同じように、ちゃんと説明が表示された。

『世界言語』

動物や魔物を除く全ての種族の言語を理解し、会話や読み書きが可能になる。元々異なる世界からこの世界に転生した人間しか持っていなかったが、稀にこの特殊能力を持った人物の子孫が受け継いでいる場合もある。

『経験値補正・10倍』

神の魂を使つて作られたスキル。自身の得られる経験値の量を増幅させる。補正値の倍率は最大で10倍。

『神のベール』

神の魂を使つて作られたスキル。所有者が認めた者以外の存在から、ステータスを見られることを完全に防ぐことができる。

「……どうなってんだ、この特殊能力？」

転生前に教えられたときからさらにチート能力が増えていて、理解が追いつかないんですけど。

「ま、まあいいか。あつて損するわけじゃないんだし……」

気を取り直して、次に加護という欄にある『サマディエラの加護』を鑑定する。

『サマディエラの加護』

神・サマディエラの加護。能力値の初期値を100まで上げ、上限を1000にする。レベル上昇速度向上のおまけ付き。信仰心の強さで効果が増えるかもしれない。

「なるほど、サマディさんの加護のおかげで、俺のステータスの初期値が1000になっているか……多いのか少ないのか分かんないけど、多分多いほうなんだろうな。いくつか100じゃないものもあるな。まあ、気にしても仕方ないか」

ともかく、どんどん調べていこう。
続いて、五つの称号の鑑定を行う。

『転生者』

異なる世界からこの世界に転生した者に与えられる称号。特殊能力『世界言語』を稀に取得する。

『神を宿し者』

神の魂を宿した者に与えられる称号。能力の上昇値が高くなる他、望めば神へ至ることもできるようになる。

『加護を受けし者』

神の加護を得た者に与えられる称号。あらゆる神から見守られるようになり、『信仰心』が上がりやすくなる。

『捨て子』

家族から捨てられた子供に与えられる称号。幸運値が少し上昇する。誰かの養子になると、この称号は消失する。

『名無し』

家を追放され、名前を捨てられた者に与えられる称号。名前は新たに自分で付け直せるが、苗字を付けることはできない。新たに名前を付け直すと、この称号は消失する。

全ての情報をひと通り確認し、しばらく考え込む。『記憶能力向上』のおかげで効果は覚えられたが、よく分からない単語が多くて、完全に理解するのは時間がかかりそうだ。SPっていうステータスも謎だし……

分からない部分は一旦後回しにして、次に何をしようかと思案する。

「とりあえず、他のスキルも試してみようかな。生活魔法を使えば、必要と思った魔法を手に入れられるから……」

試しに俺は、『今の段階で覚えられる全ての魔法が必要だ』と念じてスキルを発動させてみる。

次の瞬間、体が白く発光し、しばらくして元に戻った。

「今ので覚えられたのか……?」

もう一度ステータスを表示させ、スキル欄を確認する。

「うわっ、すごい!」

思わず大声を出してしまった。というのも、スキル欄には新しく、火、風、水、土、光、闇、雷、

水、聖、無の十種類の属性魔法が発現していたのだ。

「属性ごとに魔法が分かれているんだ。すごくたくさん覚えられたけど……」

一応、魔法が発動するのか実験してみようかな。

指先から小さな火の玉が出るイメージを思い浮かべて念を込めてみる。すると、思った通りに指の先から火の玉が出現し、宙にふよふよと浮いた。

「すごい、本当に魔法が使えるぞ……別に詠唱とかいらさないんだな。よし、次は便利ボックスを使ってみよう」

独り言を呟きつつ、頭の中で『便利ボックス、出る』と念じる。

そのとき、目の前にゲームでよく見るインベントリのような画面が表示された。こちらも詠唱なしで使えるようだ。

さっそく何かを入れてみようとしたら、インベントリにアイテムが表示されているのに気が付いた。封筒のようなイラストの下に、『四宮様へ』という名前が付いている。

「ん？ なんだこれ？ 取り出したいけど、どうやるんだろう……」

少し悩んで、とりあえず封筒を出現させるイメージを固めて念じてみる。

すると、目の前に空間の裂け目のような穴が空き、そこから本物の封筒が出てきて地面に落ちた。さっそく拾って中身を確認すると、手紙が入っている。

手紙を開いたら、サマデイさんの名前が書いてあった。

「伝え忘れたことがあったのかな？ とりあえず読んでみるか……」

手紙は全部で二枚あった。見たことのない文字だったが、世界言語のおかげでスラスラ読める。

一枚目の文面を要約すると、以下のような事情だった。

どうやらサマデイさんが俺を赤子としてこの世界に転生させる瞬間、予想外の事故が起きたらしい。というのも、俺の運命を遊びで変えていた神が、またはサマデイさんの監視の隙を突いて妨害してきたそうなのだ。そのせいで転生前の記憶の引き継ぎがうまくいかず、結局記憶が戻るのに十年かかってしまった。運のステータスが低いのも、妨害の影響だということだ。さらに、運が低くなったせいで、俺の生活は散々なものだったらしい。

「あー、それで俺は捨て子になったのか？ 運が悪すぎて最終的に捨てられた、みたいな」
推測しながら手紙の二枚目を読んでいく。

結局、俺に悪戯をしてきた神は、サマデイさんによって消滅させられたということだった。そして悪影響を与えた損害分を補うために追加で能力を与えたが、そのうちの一つが少々問題だったと書かれている。

「……ん？ 問題だったってどういうことだ？」

なんか雲行きが怪しいな、と思いつつ読み進める。

この世界には10歳になると誰もが受ける鑑定かんていの儀ぎという儀式があり、そこで子供が使えるスキルや特殊能力を見定めるのだそうだ。なぜもつと幼いうちに儀式を行わないのかというと、この世界

におけるスキルや特殊能力は、10歳にならないとステータスに表示されないためらしい。

普通ならどんな子供でも二、三個は表示されるはずなのだが、俺の場合はステータスを隠匿する効果がある『神のベール』のせいでスキルが何も表示されず、無能と判断されたのだという。これが決定打となり、家から追い出されることになったそうだ。

「いや、追い出されたのって、運の悪さじゃなくてサマデイさんのせいなのかよッ！」

思わず手紙に突っ込んでしまった。

「いや、まあ悪気があつてしたことじゃないと思うけどさ……なんか腑に落ちないな……」

色々と驚いたせいで疲れてしまった。自分の能力を確認するだけだったのに……

しかし、まだ今の状況を全て把握できていない。

「あ、そうだ。転生してから今までの十年間の記憶を辿れば、手がかりが掴めるかも」

そう考え、さっそく目を閉じて過去のことを思い出す。

十分ほどでなんとかこれまでの出来事をほとんど思い出せたが、引き出された記憶はサマデイさんの言う通り、散々なものばかりだった。

「……うーん、忘れたままでも良かったな」

思い出したのは俺に興味がなさそうに振る舞う父親、俺への嫌悪感を隠そうともしない義母、ゴミを見るような目を俺に向ける義兄弟、ことあるごとに嫌がらせをしてくるメイド達……そして唯一俺に優しくかったが、幼少期に病気で亡くなった実母。

俺は喋れるようになって間もない頃に実の母親が亡くなってから、10歳までほぼ監禁状態で生活していた。一応、鑑定の儀で使えそうなレア能力があれば家で飼育すつもりだったみたいだが、無能と分かるやいなや、家から追い出され名前まで消された。前世の記憶を取り戻すまで俺も自分のことを無能だと思っていたので、黙って出ていくしかなかったんだよな。

追放されたあととは行くあてもなく、実の母親に昔教えられた王都への行き方だけを頼りに道を歩いている途中で行き倒れたのだった。

「……その辺りの記憶が曖昧だな、力尽きて体力も精神も不安定だったからか？」

それでもなんとか、うっすら覚えている出来事を回想する。

「……確か、突然黒いコートを着た人が現れて、俺を担いでくれた気がする。フードを被っていたから顔は分からなかったけど、銀色の髪が印象的だった……あと、銀色のプレートが付いたネックレスをしていたっけ」

その人について、さらに頑張つて思い出そうとしたが、それ以上のことは何一つ分からなかった。「まあ、分からないことは後回しにしようかな。助けられたあとは、馬車に乗せられたんだっけ」そう、その次に覚えているのは、馬車に乗っていたときのことだ。その馬車は王都に向かっていくらしく、御者が運賃代は銀髪の人に払ってもらったよと笑顔で言っていた。

王都での検問の際は、いつの間にか持っていた革袋の中に入っていたお金を通行料として渡してなんとか通過できた。多分、銀髪の人が持たせてくれたんだと思う。

「で、王都の宿に泊まろうとしたら門前払いを食らって、仕方なく雨風をしのげそうな場所を見つけて野宿したのが昨日のことだっけ。うーん、自分がなんでここにいるのかは分かったけど、やっぱり助けてくれた人の顔が思い出せないな……あ、そうだ。持ってた革袋を置きっぱなしだった」
枕代わりにしていた革袋を拾い上げ、念のため中を確認する。

革袋の中には、銀の硬貨が三枚と銅の硬貨が十枚入っていた。昔のことは思い出せたけど、お金の価値を教えられたことがないから、どのくらいの価値なのか分からない。通行料を払ったときも、御者の人が代わりにやってくれたし。

お金を全て取り出し、他に何か入っていないかと袋を逆さにしてみる。
すると、一枚の紙切れがヒラヒラと落ちてきた。拾い上げると、何か書いてある。

「これ、手紙か？ 何々……『冒険者ギルドへ行け。そしてこの紙を顔に傷がある受付に渡せ』
だつて？ これって、俺を助けてくれた銀髪の恩人さんが残してくれたんだよな……よし、日が昇っているうちに冒険者ギルドってところに行ってみるか」

今後どうしようかまったく決めてないし、恩人さんが行けというならば行ったほうがいいだろう。
冒険者っていうのにも興味あるしな。

手紙と硬貨を袋にしまい、フラフラとした足取りで裏路地から出る。

途中、買い物していたおばさんに冒険者ギルドへの行き方を聞くと、親切に教えてくれた。

おばさんにお礼を言って教えられた道を歩いていると、少し厳つい雰囲気か漂う建物を見つけ

た。建物の壁に掛けられている看板には「レコンメティス王国・王都レコンメティス冒険者ギルド本部」と書かれている。

「ここで間違いないみたいだな。よし、それじゃあ入るか」
少し気合を入れて扉を開ける。

ギルドの中は、大勢の人でこった返していた。剣を腰に提げている人をはじめ、ローブを着込んでいる女性、大剣を背負っている大柄な男性など、どの人達もファンタジー感が満載な見た目だ。よく見ると、人間以外にもエルフや獣人など、様々な種族がいる。

受付を探すと、カウンターにズラ〜ッと冒険者の人達が並んでいるのが見えた。多分、あれだな。あそこに並ぶのかうと思っていると、一箇所だけぽっかりと空いている場所が目に入った。

不思議に思っ近づいてみたら、受付カウンターに真っ赤な髪をしたとんでもなく怖い顔の男性が座っていた。眉間には深い縦ジワが刻まれており、親の仇を見るような目で前方を睨んでいる。それだけでも十分怖いのに、右目にある酷い傷が、さらにその男性を怖い人相にさせていた。年齢は多分、20代後半くらいか？

紙に書いてあったのは、間違いなくあの人だろう。

俺は顔に傷がある男性のいる受付に向かう。

「すみません、これも受付ですか？」

そう声をかけると、男性はなぜかすごく驚いた顔をした。

「あつ？ ああ、そうだが……坊主、俺のことが怖くないのか？」

男性の声は、怖い顔に反して意外にも優しくかった。

「えくと、まあ正直少し怖いなあと思いましたけど、別に避けるほどでもないですよ。それより、あなたに手紙を渡したくて」

「手紙？ なんのことだ？」

怪訝けげんそうな表情を浮かべる男性に、革袋から恩人さんの手紙を取り出して渡す。

男性は手紙を広げて目を通すと、納得したような顔をした。

「なるほど、あいつか……」

「あいつ？」

「いや、こつちの話だ。それより坊主、用件はなんだ？ 依頼のお願いとかじゃないだろう？」

あ、手紙を渡してからのことを何も考えてなかった。

うーん、せっかく魔法を使えるんだから冒険者になってみようかな。

「えっと、冒険者になりたいんですけど……年齢制限とかあるんですか？」

「特に制限はないが、軽い試験がある。それに、試験を受けるにも金がいるぞ。銀貨一枚だが、持つてるか？」

「これで大丈夫ですか？」

革袋から銀色の硬貨を一枚出す。男性はそれを受け取り、受付の奥にある棚の引き出しから一枚

の紙を取り出して渡してきた。

「坊主、それを持って付いてきな」

「はい」

紙を受け取ると、男性は受付の横に設置されている扉から出てきた。

「こつちだ」

そう言うと、ズンズン先に行ってしまう。俺は慌ててその後ろを離れないように付いていった。ギルドの奥にあった階段を下りている途中、男性が振り返って話しかけてくる。

「俺はグルドって名前だが、お前の名前は？」

返答しようとして、そういえば自分が名無しの状態だったことを思い出した。

どうしよう、本名よりはやっぱりファンタジーっぽい名前のほうがいいよな……そうだ、前世ではよくゲームをプレイするときに主人公を『ラルク』って名前にしてたっけ。『楽』って本名を少しもじっていて、結構お気に入りだ。それでいいや。

「ラルクです」

「ほう、良い名前だな」

グルドさんはそう言って、また前に向き直って先に進んでいった。

3 加入試験

グルドさんに連れられ、冒険者ギルドの地下にある広い部屋にやってきた。部屋の入り口側には机と椅子が並べられ、奥のほうには変な案山子かかしみたいなのが設置されている。壁には、様々な武器が飾られてあった。

いかにも戦闘の訓練でもしそうな場所だな、と思ってキョロキョロしていたら、グルドさんが説明し始める。

「ここは、ギルドの受付係が体を動かすために使える場所だ。今回はラルクの試験場としてここを使う。とりあえずその椅子に座って、さつき渡した紙に記入してくれ」

「はい」

言われるまま、手近にあった椅子に座る。そして先ほど受け取った紙を机の上に置き、グルドさんからペンを借りて空欄を埋めていった。項目は、名前と主に使用する武器、スキルの三つだけ。武器やスキルは自分が得意とするものだけでいいと言われたので、とりあえず火属性魔法と短剣術だけを書いておく。

そんなに時間もかからず書き終わり、用紙をグルドさんに提出した。

グルドさんは紙をチェックしながら、少し疑うように聞いてくる。

「……ふむ、そうか。魔法は本当に使えるのか？」

「えっと、まだあんまり試したことがないから分からないです。ただ、使えることは使えます」

そう答えたが、なおも疑いのまなざしを向けてくるグルドさん。俺は慌てて掌てのひらに小さな火の玉を出現させる。

グルドさんは目を見開いて火の玉を見つめ、頭を下げた。

「あ、ああ、疑ってすまなかった。それじゃ、次に試験の説明をする。といっても、試験内容は簡単だ。部屋の奥にある、あの『測定案山子そくていかかし』に武器や魔法で攻撃してもらおう」

「測定案山子ってあれのことですよね？ あれに攻撃すると、どうなるんですか？」

奥にある案山子を指差しながら尋ねると、グルドさんが答えてくれる。

「胴体に透明な板があるのが見えるか？ 測定案山子に攻撃すると、威力が数値となってあの透明な板に表示されるんだ。そして、出た数値で合格か不合格かを決める」

「なるほど、わかりました。えっと、合格ラインの数値が出るまで、何度でも挑戦していいんですか？」

「大丈夫だぞ。制限時間は一時間だから、その間に基準値が出れば合格だ」

「分かりました。それじゃ、やってみます」

俺がそう応えると、椅子から立ち上がり、測定案山子のほうへ歩きます。

5メートルくらい離れた位置で止まり、どう攻撃しようか考える。
まずは、火属性魔法でどれくらいの数値が出るのか試してみよう。

「行けッ！」

念を込めて野球ボールくらいの大きさの火の玉を作り出し、掛け声とともに投げつける。火の玉が測定案山子にぶつかると、胴体部分にある透明な板に「101」という数値が出た。

……これって合格なのか、不合格なのか、どっちだ？ グルドさんに何点以上が合格なのか聞くのをすっかり忘れていた。

「えっと、これってどうなんですか？」

そう聞くと、グルドさんが額をパチンと叩いた。

「ああ、うっかりしてた。合格の数値を言ってなかったな。合格ラインは300だ。単純に考えて、今の魔法の三倍くらいの威力が必要だな」

「さ、三倍か……」

全然合格ラインに到達していないじゃん……

少し落ち込んだが、諦めずに火の玉を案山子に投げつける。

しかし、いくら挑戦しても合格値に達することはなかった。板に表示された数値は最高で「159」だ。一応最初より高い点数だが、合格ラインにはまだ半分しか届いていない。

でも、なんでさっきより数値が高くなったんだろう？

確認のために『鑑定眼』でステータスを表示させる。

| | |
|-------|--|
| 【名前】 | ラルク |
| 【年齢】 | 10 |
| 【種族】 | ヒューマン |
| 【性別】 | 男 |
| 【状態】 | 飢餓・疲労・魔力減少気味 |
| 【レベル】 | 1 |
| 【S P】 | 0 |
| 【力】 | 100 |
| 【魔力】 | 109 |
| 【敏捷】 | 100 |
| 【器用】 | 100 |
| 【運】 | 51 |
| 【スキル】 | 『調理』3 『便利ボックス』1 『生活魔法』1 『鑑定眼』1 『短剣術』1 『魔力制御』1 (NEW) 『毒耐性』1 『精神耐性』3 『飢餓耐性』1 『火属性魔法』2 (NEW) 『風属性魔法』1 (NEW) |

- 『水属性魔法…1』(NEW) 『土属性魔法…1』(NEW)
- 『光属性魔法…1』(NEW) 『闇属性魔法…1』(NEW)
- 『雷属性魔法…1』(NEW) 『氷属性魔法…1』(NEW)
- 『聖属性魔法…1』(NEW) 『無属性魔法…1』(NEW)
- 【特殊能力】『記憶能力向上』『世界言語』『経験値補正…10倍』『神のペール』
- 【加護】『サマディエラの加護』
- 【称号】『転生者』『神を宿し者』『加護を受けし者』『捨て子』

魔力が減少しているのはなんと分かってはいたが、それでも魔力の能力値は若干上がっていて、さらに火属性魔法のスキルレベルも上がっている。『名無し』の称号も消えていた。

また、『魔力制御』というスキルを新たに手に入れていたので驚いてしまった。『鑑定眼』で識別してみると、どうやらこれは、自動で魔力をコントロールし、魔法の精度と威力を上げてくれるスキルらしい。

「なるほど、魔力とスキルレベルが上がったおかげで威力が上がっていたのか……しかも、新しいスキルまで覚えているとはね」

独り言を言いながら、測定案山子に向き直る。

新しいスキルを使えば、もっと大きな火の玉が作れそうだ。よし、少し希望が見えてきたぞ。

俺は火属性魔法を発動し、続けて『魔力制御』を発動して炎の出力を操作する。

スキルがうまく発動し、バスケットボールサイズの火の玉を作り出すことに成功した。

両手で火の玉を持ち、測定案山子に向けて勢い良く放つ。

炎がぶつくと、透明な板に「324」と表示される。

俺は喜びの声を上げようとして、地面に倒れてしまった。流石に無茶すぎたかな、とぼんやり考えた次の瞬間、プツンと意識がなくなったのだった。



「ん……ここは？」

目が覚めると、知らない天井が目に入る。どうやら気を失っている間に、ベッドの上に寝かされていたらしい。

身を起こそうとするが、フラッシュと眩暈がして、起き上がれなかった。

仕方ないので大人しく寝ていると、ガチャリという音が聞こえる。音のしたほうを見ると、グルドさんが扉から入ってきていた。

「おつ、目が覚めたみたいだな。無茶をしたもんだから、倒れたんだよ。ギルドの医務室まで運んで診てもらったら、栄養失調ってことだったから休息用の個室に寝かせたんだが……大丈夫か？」

いたわるように声をかけてくるグルドさん。なんだか申し訳なくなってしまう。

「はい、もう大丈夫です。それよりグルドさん、すみません。試験中に倒れてしまって……もしかして、失格ですか？」

「いや、試験は合格だ。最後に300点以上を出したからな。それよりお前、自分の体調管理くらいちゃんとしろよ。冒険者としてやっていくなら、そういつたところが一番大事なんだぞ」

「す、すみません。王都に来てから食べるのを忘れてました」

「まったく……今スープを持ってくるから、大人しく待ってよ」

グルドさんは呆れたように言い、部屋から出ていった。

言われたとおり静かに待っていると、グルドさんがスープの皿を載せたお盆を持ってくる。スプーンも持てない俺の代わりに食べさせてくれた。スープは野菜がたくさん入っていて、美味しかった。

その後、まだ万全ではないからもう少し寝ているとグルドさんに言われ、もう一度眠ることにした。

数時間後、再び目覚める。スープを食べて満腹になり、しっかり眠ったおかげで体調は完全回復した。

ベッドから起き上がり、そういえば記憶が戻ってから自分の顔をまだ見てないなと思って部屋に

「設置されてある鏡を覗き込む」

「うわっ、これが俺か！」

そこに映っていたのは、銀髪の小柄な少年だった。

前世では一度も髪を染めたことがなかったので、かなり戸惑ってしまう。顔立ちは前世のような日本人の顔ではなく、ファンタジー世界っぽくなっていた。自分で言うのもちよつとおかしいけど、わりと整っているんじゃないかな。

背丈は130〜135センチほどだろう。かなり痩せていたので、栄養失調に陥るのも納得だ。

鏡から目を離し、部屋の窓から美しい王都の街並みを眺める。既に日が沈みかけているが、建物や街灯から光が出ているので、それほど暗く感じない。

そういえば、今俺がいる部屋にもランタンのような道具が天井から吊り下げられて、部屋の中を照らしていた。流石に電気動いているわけではなさそうだ。おそらく魔力を交換して光を生み出しているんだろう。多分、ほとんどの道具はこのランタンと同じように魔力で動くんじゃないかな。そんなことを考えながら外の景色に見入っていると、部屋の扉が開き、グルドさんが入ってきた。

「調子はもう大丈夫か？」

「はい、グルドさんのおかげで万全です。色々ご迷惑をかけてしまってますみません」

「いや、いい。俺も今日は久し振りに仕事ができたと、良かったよ」

グルドさんが笑って言った。

俺はふと、グルドさんの真つ赤な髪を見て、あることが心配になる。

「あの、この辺で銀髪って珍しいんですかね？」

「ん？　なんでそう思うんだ？」

「あつ、いえ……特に深い理由とかはないんですけど、街では赤とか緑とか、いろんな色の髪を見たんですよ。でも、銀髪の人は見なかったな〜と思います」

グルドさんは腕組みをして思案し、ゆっくりと答える。

「……まあ、確かに銀髪は珍しい色だと言われている。この広い王都にも滅多にはいないだろうな。でも別に髪の色なんか、深く気にすることじゃないぞ。銀髪はラルクだけじゃないし、俺の知り合いにも一人いるしな」

「なるほど、そうだったんですね」

グルドさんの言葉を聞いて、少し安心する。別に銀だからといって、変な理由があるわけではないんだな。

その後、グルドさんの厚意で夕飯をご馳走してもらった。お昼ご飯も食べさせてもらっていたので一度は断ったが、子供が遠慮すると言われてしまい、ギルドの食堂に連れていかれる。

グルドさんは俺を椅子に座らせ、注文に行ってしまった。甘えっぱなしで悪いな、と思いつつ待っていると、30代後半くらいで少し老けた感じの男性がこちらに歩いてきた。

男性がテーブルを挟んだ真向かいで立ち止まり、声をかけてくる。

「坊主、なかなか肝が据わってるな。あのグルドが子供と話してる姿を久し振りに見たぜ」

「グルドさんは良い人ですよ。えっと、まあ顔は少し怖いですけど」

「ハハッ、そうだな。だが坊主の言う通り、あいつは王都で一番良い奴だと俺は思ってるぜ」

談笑していたら、男性の後ろ側からグルドさんが帰ってきて、男性の頭を小突く。

「何やってんだ、お前」

「いやな、グルドが子供を連れてるって食堂の料理人どもが言ってたから、確かめに来たんだよ。おっとすまん、挨拶が遅れたな。俺はフリッツ。冒険者ギルドの食堂長してるんだ。よろしくな」

フリッツさんが右手を差し出してきたので、がっちりと握手する。

「よろしくお願ひします、フリッツさん。俺はラルクです」

「おう、よろしくな。それじゃ、仕事に戻るか〜」

そう言うと、フリッツさんは調理場へ帰っていった。

グルドさんが顔を寄せて小声で聞いてくる。

「あいつ、なんか変なこと言ってなかったか？」

「いえ、何も言ってませんでしたよ」

「そうか、あいつは冗談好きだから、もし何か言われても真に受けるなよ……ああ、そういうばギ

ルドについて説明しなかったな。今話してもいいか？ 本当は、試験のあとにするつもりだったんだが」

「はい、お願いします」

うなずくと、グルドさんはギルドについて説明してくれた。大体のルールはよくあるゲームの世界と同じような感じで、要約すると次のようになる。

冒険者とは、基本的に個人や団体から依頼を受けて、達成したときに受け取る報酬で生活する専門の職業ということだ。

冒険者にはランクがあつて、A・B・C・D・Eの五段階に分かれているらしい。Aランクになると一流の冒険者として国からも重用ちゆうようされるのだそう。

そして、ギルドは冒険者達を補助するために作られた組織で、本部であるこの建物には様々な設備が揃っている。冒険者として登録されると、設備を使う際の料金が安くなり、場合によってはタダになるとのこと。

ひと通り説明し終えたグルドさんは、ズボンのポケットに手を入れて何かを探し始める。

「えーっと、ああ、あつた。お前に渡すものがあるんだ」

そう言って取り出したのは、ネックレスと小さな針だった。ネックレスのトップには銅のプレートが付いており、Eという刻印あかしがされている。

「これは、ギルドに所属している証あかしのネックレスだ。これを見れば別の街へ行つたときの通行料

が免除になったり、他の国へ行つた際に身分証代わりになったりするから、絶対になくすんじゃないぞ。それと、そのプレートには個人を登録するために血を垂らさないといけない。この針でパツとやりな」

グルドさんからネックレスと針を受け取り、言われた通りに針を指に刺す。そして血を一滴垂らすと、プレートがかすかに光り、Eの刻印の下に俺の名前が刻まれた。

そのプレートの形になんとなく見覚えがあることに気付き、グルドさんに質問してみる。

「あの、このプレートって色が変わったりするんですか？」

「ああ、EからDは銅、CからBは銀、Aは最高ランクの金色という風になるようになってる。素材はどれも同じ魔法金属のままだがな」

「なるほど……」

やっぱり、このネックレスは俺を助けてくれた恩人さんが着けていたものと一緒みたいだ。恩人さんのプレートは銀色だったから、あの人はBランクかCランクの冒険者だったのかな。

恩人さんのことを思い返していたら、フリッツさんがステーキとスープのセットを持ってテーブルにやってきた。一旦思考を中断し、グルドさんに感謝しながら食べ始める。

夕食を食べ終え、グルドさんと一緒に食器を返却口に戻しに行く。

片付け終わって食堂をあとにしようとしたとき、返却口の向こう側からフリッツさんがひよっこ

り顔を出してきた。

「ラルク、グルドと仲良くな」

「帰れっ！」

グルドさんが近くに落ちていたスプーンを拾い上げ、フリッツさんに投げつける。スプーンは凄まじいスピードでフリッツさんの脳天に直撃し、フリッツさんは後ろにひっくり返った。

受付に戻る途中、グルドさんがため息をついた。

「はあ……フリッツの奴、俺が珍しく子供の相手をしてるからって調子に乗りやがって……」

「グルドさんって子供から嫌われてるんですか？ 確かに顔は怖いですけど」

「嫌われてるってほどでもないが、避けられてるな。大抵の子供は一目見ると怖がって逃げちまう。大人の冒険者も、俺みたいな野郎より他の受付嬢のほうに行くしな……」

顔の傷痕を撫でながら、グルドさんが寂しそうに言った。

その後、今日はもう遅いから医務室に泊まっていけと言われて、お言葉に甘えて医務室に戻り、眠りについた。

4 初仕事

目が覚めて身を起したら、ベッドの横に手紙が置かれているのが目に入った。手に取って封を開けると、『起きたらグルドマスター室へ来い』とのこと。場所が分からないからどうしよう、と思っていたら裏に手書きのグルドの見取り図があった。多分グルドさんが書いたんだろうけど、マメな人だな。

俺は身支度を整えると、すぐに部屋を出てグルドマスター室に向かった。

階段を上がって目的の部屋に着き、ドアを恐る恐るノックする。

「えっと、失礼します……」

部屋の中央には机と椅子のセットが置かれており、グルドさんと綺麗な二人の女性が対面で座っていた。

女性は二人とも、緑色の髪で長い耳をしている。グルドでも何人か見かけたけど、どちらもファンタジー世界でおなじみのエルフだと思う。一人の女性は髪の色や耳の長さなど似ている部分があったが、雰囲気は正反対で、一人はクールな感じだけど、もう一人の女性は活発そうな印象だ。

グルドさんがこちらに気付き、笑顔で声をかけてくる。

「よう、待ってたぞ」

「おはようございます。あの、なんで俺は呼び出されたんですか？」

そう尋ねた瞬間、活発そうなエルフの女性が感心したように口を挟む。

「わあ、本当にグルドと普通に会話してる……驚いたわ、ララ」

ララと呼ばれたクールそうな女性が、たしなめるように答える。

「マスター、そんな言い方したらグルドさんに失礼ですよ。それと、あの子への挨拶が先でしょう……こほん、初めまして。今驚いていたこちらの方が王都レコンメティス・冒険者ギルド本部のギルドマスター、リーフィア・シル・フォルトリオス。そして、私が副ギルドマスターのララデイーナ・モネリアです。よろしく、ラルク君。彼女のことはフィア、そして私のことはララと呼んでくださいね」

クールそうな女性、ララさんがニッコリと微笑む。そしてソファに座るよう勧められたので、グルドさんの横にちょこんと座った。

「……それで、用件はなんでしょうか？」

おずおずと聞くと、ララさんが答える。

「ああ、そうでしたね。実は昨日、あなたを冒険者として登録をする際に一つ気になったことがあるんです。ラルク君、ご家族はいらっしゃいますか？」

「あつ、えつと……ちよつと前に追い出されちゃって、今は一人です」

そう答えたら、グルドさんが「やつぱりか……」と小さく呟いた。

ララさんが真剣な表情で質問を続ける。

「これは気に障るようなら答えなくてもいいのですが……なぜ追い出されたんですか？」

「……10歳になったら受ける鑑定の儀で、スキルが一つも表れなかったからです。それで無能だと判断され、捨てられました」

俺の言葉に、グルドさんが驚いた様子で反応する。

「昨日、魔法を使っていたじゃないか!？」

その言葉はもつともだ。別に『神のベール』の存在を隠すつもりもないし、この場で言ってもいいかな。

「それは、特殊能力のせいだと思います。俺にはどんな鑑定系の魔法でも弾く特殊能力があつて、そのせいで鑑定の儀で何も表示されなかったんです」

俺の言葉が衝撃的だったのか、みんな黙り込んでしまった。しばらくして、ララさんがおもむろに口を開く。

「……私は鑑定魔法を覚えています。すみませんが、ラルク君に使ってみてもいいですか？」

「はい、いいですよ。一応、確認のために火の玉を出しますね」

小さな火の玉を出し、フィアさんとララさんに確認してもらう。それからララさんが両手を俺にかざした。そのまま数秒間黙っていたが、やがて手を下ろして驚きの表情を浮かべる。

「これは……信じられませぬ。本当に何も表示されませんでした。これなら、鑑定の際でスキルの確認ができないのは当然でしょう。私の鑑定魔法のほうが性能が良いですからね」

そうなんだ。やっぱり冒険者ギルドの副マスターって、かなりレベルが高いんだな。

そんなことを考えつつ、一同を見回して尋ねる。

「あの、用件はこれだけですか？」

「はい、お呼びしたのは身元を確認するだけです。グルドさん、ラルク君を下まで連れて行ってあげてください」

ラルさんの言葉を受け、グルドさんが立ち上がる。俺も一緒に立ち上がって、二人に手を振って退室した。

階段を下りて一階の受付に行くと思っただが、グルドさんはさらに下り、地下の一室にやってきた。

辺りにはたたくさんの毛皮や植物が入った木箱が大量に転がっている。ここは倉庫として使われているようだった。

ここで何をするんだろうと考えていると、グルドさんが声をかけてくる。

「すまないが、倉庫整理の仕事を手伝ってもらいたくてな。昨日、大勢の冒険者が一気にクエストから帰ってきて、素材を大量に持ち込んだんだ。達成報酬の手続きで他の職員も手が回らないから、普段冒険者の相手をしていない俺に仕事が回ってきたんだが、一人じゃこの量はな……そこでラル

ク、最初の依頼として倉庫整理を頼みたい。受けてくれるか？」

「単にこれを片付けるだけですよね？ いいですよ」

迷うことなく即答する。先日のお礼もしたいことだしね。

ということで、グルドさんと一緒に素材の整理を始めることになった。最初は結構面白かったが、十分も経たないうちに、かなり面倒な作業だと判明する。一つの木箱から植物と毛皮を選り分け、仕分け先の木箱にそれぞれ詰め直す。たったそれだけなのに、やってみると意外と大変だ。

始めて三十分くらい経ったところで、グルドさんが朝食を取ってくるために部屋を出ていった。今のうちにできるだけ素材を片付けておきたいけど、何か良い案はないかな……

「……そういえば、『便利ボックス』にどんな機能があるかちゃんと確認してなかったな……」

ふと思いつき、『便利ボックス』を鑑定してみる。

『便利ボックス』

便利な能力が追加されていく不思議な収納系スキル。自身から半径5メートル内に存在するものをボックスに出し入れすることができる。

「あれ、これを使えば楽に素材の整理ができるんじゃないか？」

『便利ボックス』にアイテムを収納すると、自動で種別ごとに整理される。これを利用して一度木

立ち読みサンプル
はここまで

箱の中身を全部『便利ボックス』にしまい、もう一度取り出して仕分け先の木箱に入れば、すぐに整理できそうだ。

さっそく整理の終わっていない木箱に近付き、『便利ボックス』を発動する。すると、木箱の上に空間の割れ目が出現し異次元の中に素材が吸い込まれていった。そしてインベントリを開いて植物と毛皮が種類ごとにまとめられているのを確認し、仕分け先の木箱にそれぞれの素材を出して終了。

その間、なんとたったの五秒。ほとんど一瞬で一つの木箱の整理が済んだ。

「おお、これは楽だな……よし、グルドさんが帰ってくる前に全部終わらせちゃおう」

次々と木箱の中の素材を『便利ボックス』に収納し、仕分け先の木箱に出していく。ついでに空になった木箱も『便利ボックス』を使って隅に積み上げておいた。

五分ほどで倉庫の整理が終わったのだった。

時間が余ったので座って待っていると、グルドさんが朝食を持って部屋に帰ってくる。そしてすつかり片付いた倉庫を見て、あんぐりと口を開けた。

「い、一体どうなってんだ!？」

「あつ、グルドさんお帰りなさい。この部屋の素材、全部整理しておきました」

「あ、ああ、お疲れ……いやいや！ お前、どうやったんだ？ あんな量、絶対今日中には終わらないと思っていたんだぞ？」

「えっと、俺、収納系スキルを持つてるんですけど、それを使って終わらせました」

「……収納系スキルか。またレアなスキルを持つてるな……」

神妙な顔で俺をジッと見つめるグルドさん。何か突っ込まれたらどうしようかな、と身構えたが、グルドさんは特に追及してこなかった。

「まあ、早く終わるならそれに越したことはないな……よし、じゃあ次の部屋に行くぞ」

「えっ？ ここだけじゃないんですか？」

「……俺もそう思ったかったんだが、あと三部屋も残ってるんだよ」

そう言うグルドさんは、どこか遠い目をしていた。



次の部屋に移動すると、先ほどの部屋に勝るとも劣らない量の木箱の山が俺達を待ち構えていた。『便利ボックス』がなかったら、何日かかることやら……

「ラルク、お前のスキルがどんなものか見せてくれるか？」

軽くうなずき、グルドさんに部屋の端へ移動してもらおう。

「さてと、やるか」

小さく呟き、『便利ボックス』を発動させて近くの木箱の中身を手早く吸い込んでいく。そして